ルポルタージュ

２１世紀は農業と福祉の時代

― 地域社会と連携した校外実習 ―

鹿児島県立加世田常潤高等学校

これからの専門高校は，これまで以上に，家庭，地域社会，学校の三者が連携を図りながら，ふるさとの豊かな自然や文化及び地域の人材・施設等による体験活動を通して，生徒，教師，保護者及び地域住民が「共に学ぶ」視点でのパートナーシップの確立が大切であると考えられる。また，平成12年度からは，「総合的な学習の時間」を加えた教育課程を編成することができ，各学校の創意工夫を生かした教育活動の展開が必要となってくる。そこで，平成２年度から校外実習を実施している加世田常潤高等学校の地域社会と学校とのパートナーシップの在り方について取材を行った。

１　農業教育での取組

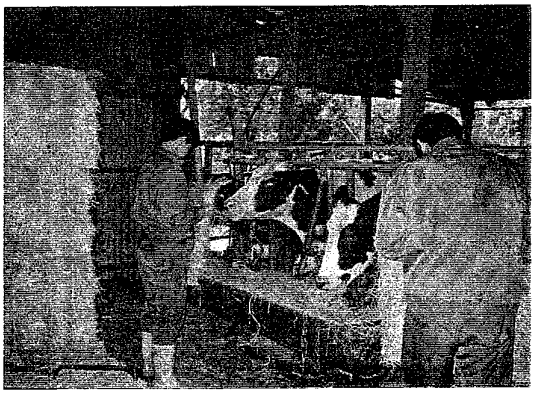
(1)　現場実習におけるインターンシップ

ア　農業経営科

農業経営科では，地域の農家やＪＡ南さつまを中心とした関連事業所で，２年生を対象に平成９年度から現場実習を実施している。これは，郷土の農業や農協の事業・活動状況等，さらに農産物流通のしくみ等について体験学習し，併せて生徒の勤労観や職業観の育成を目的にしたものである。今年度は，12名の生徒が野菜，茶，畜産農家で，また，その他の生徒はＪＡの各事業所でレジや販売，農機具センターにおける機械実習等，さらに，福祉関係の仕事に従事したいという女子生徒は，老人等給食センターで１週間の実習を行っている。

イ　食品工学科

食品工学科では，地域の食品関連産業の事業所で，２年生を対象に平成２年度から現場実習を実施している。これは，かねて学校で学習している農畜産物食品加工等の専門的知識や技術の体験的理解，進路選択の参考にすることを目的にして，今年度は12事業所で２週間の実習を行った。


酪農家での現場実習

現場実習終了後，生徒たちの表情には，社会の厳しさを体験しながら，無事に目的を達成した成就感がみられ，その後の進路選択等に大いに参考になっている。また，受入れ先からは，生徒たちが懸命に取り組む姿勢に対して，良き理解をいた

だくとともに，農業経営科においては，期間延長の要望が出ているほどである。

(2) 専門高校等と地域との連携推進事業

同校は，平成10年度から２年間，文部省指定事業推進実施校として取り組んでいる。これは，専門高校等と地域との連携を一層推進するため，専門高校等を含む地域が指定され，学校及び地元産業界をはじめとする地域の関係者等から構成される連絡会議を設置するとともに，地域に開かれた高校づくりのための実践的な調査研究を行い，その成果の普及を図ろうとするものである。

ア　研究事業内容

① 学校・地域連絡会議の設置

ＪＡ南さつま本所の管理部長を中心に，管内３農業改良普及所長及び公共職業安定所長，地元企業関係者や本校職員の計17名の委員からなる連絡会議を設置し，事業を推進している。

② インターンシップなど産業現場等における実習を推進し，その充実を図っている。

③ 社会人講師の活用

平成10年度は，農業経営科・食品工学科・生活福祉科の３学科で，計23テーマの講話や実演・実習を実施している。中でも無人ヘリコプターによる農薬散布やフラワーアレンジメント，プロに学ぶお菓子づくりなど生徒も大変興味をもって取り組んでいた。さらに，焼き豚製造実習で学んだ技術を生かし，焼き豚を同校の新製品として製造・販売する引き金となった。

イ　事業の成果

現場実習については，文部省の指定以前から実施していたが，連絡会議設置等により，さらに連携が強化され，その充実が図られている。

また，社会人講師の活用は，学校で普段学べない専門的な講話や技術指導を受けることができ，生徒の職業観の醸成に役立っている。

2　福祉教育での取組

(1) 福祉実習におけるインターンシップ

生活福祉科の福祉コースの３年生は，５月下旬から６月上旬の４週間，同じく２年生は10月下旬の２週間，地域の特別養護老人ホームと老人保健施設の８か所で福祉実習を行っている。実習の主な目的は次の通りである。

○　社会福祉に関する知識と技術を活用し，実習を通して社会福祉に携わる者としての必要な能力と態度を育てる。

○　介護専門職として，必要な知識や技術を現場で実習し，それを応用できる能力を養う。

○　実習を通して，施設や高齢者に対する理解を深め，専門教科についての学習意欲の向上を図る。

福祉実習（食事介助）

実習に当たっては，守秘義務の遵守など介護者としての心得，校外の施設における実習であっても，常に授業時間であることを忘れず，実習生としての自覚をもって責任ある行動に努めることなどについて，実習始め式等を通して指導の徹底を図っている。生徒たちは，「今まで考えもしなかったことに気付いたり学んだりして，入所者への思いが変わった」，「おむつ交換やシーツ交換などを体験でき，現場の大変さがわかった」，「お年寄りと話をしたり，コミュニケーションが取れるようになり嬉しかった」など，多感な高校生にとって貴重な体験学習となっている。

(2) ボランティア活動

同校は，加世田市社会福祉協議会のボランティア育成事業協力校の指定を毎年受け，地域と連携したボランティア活動を展開している。その功績から，平成3年には国際ソロプチミスト青少年ボランティア賞を受賞した。また，県福祉作文コンクールでも最優秀賞等を受賞している。

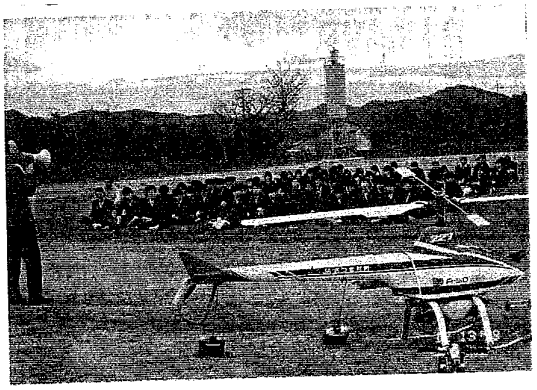
平成11年度のボランティア活動の目標は，「主体的にボランティア活動ができる生徒の育成」である。生徒たちは，農業クラブを中心とした環境緑化活動や家庭クラブを中心とした保育園・幼稚園・老人福祉施設等の訪問活動，生徒会活動を基本とした赤い羽根等の募金活動や養護学校との交流活動，また，生活福祉科の生徒の自主的な社会福祉施設でのボランティア活動等を積極的に行っている。

生徒たちは，こうしたボランティア活動が円滑に実施できるように，加世田市社会福祉協議会の主催する手話・点字講習会や，南薩少年自然の家主催の障害児ふれあいキャンプ等を受講する生徒も増加してきている。このような地域社会と常に連携の取れたボランティア活動が，職場開拓にも大いに効果を挙げている。

3 取材を通して

加世田常潤高等学校は，地球温暖化防止に効果があるケナフの試験栽培をしたり，近隣の学校や施設に苗を提供して環境教育の支援も行っている。また，地域の幼稚園，小・中学校，養護学校の子供を迎えて，サツマイモや落花生を栽培する「ふれあい農園」の実施，加世田市と連携した国道沿いのワイルドフラワー園の設置，県民体育大会実施に伴う関係機関・学校に対する花苗の提供など，花いっぱい運動の中心的な役割を果たしている。さらに，加世田川の河川敷や運動公園等の空き缶拾いや草払いも実施しており，地域と連携を図りながら積極的な緑化推進活動を展開している。このような様々な活動が評価され，平成10年度，緑化推進運動功労者内閣総理大臣賞を受賞した。

これからの学校教育に求められる方向性の一つは，こうした地域に開かれた特色ある学校づくりである。社会との関わりを通して，学校が保護者や地域社会と協力関係を確立していくことが，よりよい学校づくりを進めるために必要である。この意味で，加世田常潤高等学校の農業や福祉の教育活動にこれからの新しい教育の在り方を垣間見る感がした。



外部講師による無人ヘリ実演

（情報処理教育研修室　研究主事　橋　口　紀　文）